

イシスとキリスト— D.H.ロレンスの『逃げた雄鶏』(『死んだ男』)
に描かれた「復活」

Isis and Christ in D. H. Lawrence's *The Escaped Cock*
(*The Man Who Died*)

出水純子

Junko Demizu

キーワード：D.H.ロレンス、『逃げた雄鶏』(『死んだ男』)、神話、神智学、『オカルト・レ
ビュー』、ブラヴァツキー『イシスの女神の真相』

Keywords: D.H.Lawrence, *The Escaped Cock* (*The Man Who Died*), Mythology, The-
osophy, *The Occult Review*, H.P. Blavatsky: *Isis Unveiled*

Summary

D.H. Lawrence's last short novel *The Escaped Cock*, later changed the title to *The Man Who Died*, is a story about The Resurrection. The first part of the story was written in 1927, when he visited the Etruscan places during Easter season. It is generally recognized that Etruscan people's idea of eternal life, an egg painted on the wall of the Etruscan tombs and a toy of a rooster emerging from an egg in a shop window in Volterra made Lawrence write *The Escaped Cock*.

But a question arises. Why is it the story of Christ and Egyptian Goddess Isis? To answer this question, the social background of *The Escaped Cock* has to be considered. In the Edwardian age Christianity was losing credibility among educated people. Psychical researchers and spiritualists flourished and the Society for Psychical Research and Theosophical Society, etc. were founded. Lawrence became interested in Theosophy. He read a monthly magazine, *The Occult Review* and a book *Isis Unveiled* by Madame H.P. Blavatsky, the founder of the Theosophical Society.

An article titled 'ISIS-MARY' in the *The Occult Review* and Blavatsky's *Isis Unveiled* seem to have influenced Lawrence to write *The Escaped Cock*, a new mythology based on the Egyptian Osiris-Isis Mythology.

はじめに

ロレンスは、45年間という短い一生の内に実に多くの国々を訪れて小説や詩、エッセイを書いている。長編小説としては、イタリアを舞台とした、『アーロン杖』、オーストラリアを舞台とした『カンガルー』、メキシコで執筆した『羽鱗の蛇』などがある。『イタリアの薄明』、『海とサルデニア』、『メキシコの朝』、『エトルリア遺跡』などは紀行文として分類されているが、単なる紀行文というよりは、ロレンスの思想が描かれた作品である。人生がほとんど旅の連続であり、訪れる国々の人々、文化、風土、歴史と触れ合いながら思想を形成していったロレンスは「思想の冒険者」であり、「自文化にも異文化にもどちらにも属さない、文化の間を生きることによって、それを創造の原動力にするような活動をする知識人」（青木、p.173）、現代の用語で言えば「ディアスポラ」の先駆けであったと言えよう。

『逃げた雄鶏』(*The Escaped Cock*)は、ロレンスの没後『死んだ男』(*The Man Who Died*)と改題されるが、『チャタレー卿夫人の恋人』とほぼ同時期に書かれたロレンス最後の中編小説である。1927年3月にロレンスが画家で仏教学者のブルースターとともにエトルリア遺跡を訪れた時、イタリアのヴォルテラの町のショーウィンドーで見かけた、イースターの卵と白い雄鶏の玩具から『逃げた雄鶏』という小説の題名を思いついたという。エトルリア遺跡を訪れたロレンスは、エトルリア墳墓の壁面に描かれた、あの世での楽しい饗宴を開いているエトルリア人たちの姿を見て、冥界がこの世の続きであり、天国も煉獄もないというエトルリア人の死生観を知った。また、男が復活の卵を手を持って高くさしあげている壁画と、イースターの象徴である復活の卵からヒントを得て、キリストが葬られた墓から抜け出し、肉体を持った一人の男として復活する物語を書いたという説が一般的である。この説の裏づけとなっているのは1927年5月3日にブルースターに宛てた次の手紙である。

「復活」の物語を書きました。キリストが立ち上がり、あらゆることに吐き気をもよおします。昔の聴衆にはうんざりして、もはや顧みることをしません。傷が癒えると、この地上の世界が、救済や天国よりもはるかにすばらしいものであることを知り始めます。それでもはや「伝導」する必要のなくなった星のめぐり合わせに感謝します。ヴォルテラで見かけた玩具から、この話に『逃げた雄鶏』と名付けました。(Letters, VI, p.50)

確かに『逃げた雄鶏』の第一部は、聖書に基づいてキリストが墓から出て、マグダラのマリアに出会うという復活の物語になっている。しかし、第二部では、イシスの神に仕える女が登場し、キリストはこの女性との肉体的交わりによって、肉体を持った一人の男として甦る。長い旅の果てにようやくロレンスは、キリスト教と異教を出会わせることで、若い頃か

ら抱いていた、キリスト教への懐疑に結論を出したのである。『逃げた雄鶏』は、孤独な魂の救済だけではなく「全一性 (wholeness)」を求めている点で、『アポカリプス論 (黙示録)』へと発展していく。また、'phallic vision'を描いた点で、同時期に書かれたロレンスの最後の長編小説『チャタレー卿夫人の恋人』と相互に関連している。『逃げた雄鶏』でキリストがイシスの女に「生命と再生の種子を蒔き」彼女の元を去るという結末と、『チャタレー卿夫人の恋人』で、森番メラーズが懐胎したコニーのもとを離れ、やがて春が来て子供が生まれて二人の関係が再生されるのを待つという結末には共通点が見られる。

ロレンスは、彼が生きたエドワード朝時代に流行した神秘思想にも生涯関心を抱いていた。数多く出版された神秘思想の雑誌の中に、ロレンスも読んでいた *The Occult Review* (図 1, 2)がある。この雑誌に掲載された 'ISIS-MARY' という記事は、古代エジプト神話のイシスの女神がキリスト教の聖母マリアに名前を変えたという史実を証明しようとしたものであり、『逃げた雄鶏』のイシスの女神に仕える女とキリストとの出会いを考察する上で無視できない資料である。神智学者 Madame H.P. Blavatsky (1831-91) の *Isis Unveiled* もまた、イシスの女神と聖母マリアの関係に触れている。ロレンスが Blavatsky の著書も読んでおり、友人にも薦めるほど関心を示していたことも考慮する必要がある。

本論では 'ISIS-MARY' と *Isis Unveiled* を取り上げて、『逃げた雄鶏』執筆の背景には、「エトルリア墳墓の壁画」と「イースターの卵」に加えて、これらの神秘思想の著書と、地中海沿岸地方にロレンスが滞在して見聞きしたイシス、オシリス神話の世界があることを検証してみたい。テキストは、1928年初版で1973年に再版された *The Escaped Cock* を使用した。日本語訳は、1957年に初版が出た、福田恒存のものを使用したが、旧仮名づかい等は変更した。

最初にロレンスと神秘思想との関わり、エトルリアへの旅から『逃げた雄鶏』執筆までの経緯を年表で示しておきたい。

1911年 *The New Age* で神学と神智学に関する記事を 9 篇読む。

1915年 自分をキリストに例えて生涯髭をはやす。(図 5 参照)

1917年7月 Blavatsky, *Isis Unveiled & The Secret Doctrine* を読む (D. Eder <精神分析学者> への手紙)。ロンドンで神智学 (神秘思想) に関する講演を何度か聞きに行く。

1918年11月13日 N. Henry (オックスフォード大学出版局のフリーランス編集者) への手紙で、図書館または *The Occult Review* の出版社の Rider 氏から借りて *Isis Unveiled* を読むよう薦めている。

1919年春 *The Occult Review* を読む。

1920年 エトルリアに関する本を読む。

1922年12月31日の手紙で、Frederick Carterに*The Occult Review*と*Theosophical Review*を読んでみるよう薦めている。フレーザーの『金枝篇』を再読する。

1925年1月エッセイ「復活」執筆。

2月メキシコから英国に帰国。11月に地中海沿岸地方に戻る。

1927年3月 ブルースターとエトルリアへ旅する。

4月～5月 『逃げた雄鶏』第1部執筆。

5月 絵画「復活」完成。(図6参照)

1928年1月 『チャタレー卿夫人の恋人』(第3決定稿)完成。

8月 『逃げた雄鶏』第2部完成。

1929年8月 エッセイ「復活の主」執筆。

I. エドワード朝の神秘主義とロレンス

*The Edwardian Temperament, 1895-1919*を書いたJonathan Roseは、ヴィクトリア朝時代が終わり、エドワード朝に入ると、聖書に対する批判や、「進化論」を提唱するダーウィニズム、宗教に先行する神話の意義を解明した宗教人類学者フレーザーの『金枝篇』(1890年初版、1911-15年に決定版12巻出版される)などによって、従来のキリスト教は教養人の間で信頼を失っていき、教会離れが始まったと述べている。オックスフォード大学を出て神父になる者の数も激減し、神の不在とともに、モラルの規準も失われ、宗教懐疑者であるHenry SidgwickやBeatrice Webb達は、社会道徳が崩壊するのではないかと危惧した(p.1)とも述べている。

The Psychical Researcherが1882年に設立され、Society for Psychical Research (SPR)ではテレパシーが研究された。1895年には150もの神秘主義者協会が設立されており、その数は1908年には390にも達した(Rose, p.11)。このような世俗的な宗教は、小説家ではJames Joyce, Virginia Woolfをはじめ、シャーロック・ホームズ探偵小説で有名になったConan Doyle等にインスピレーションを与え、またH.G.Wellsを含むフェビアン協会のメンバー達にも影響を与えた。Conan Doyleは1893年にSociety for Psychical Researchに加入し、神秘主義運動が活発になると、彼はその先駆者となった。W.B.Yeatsも1913年に同じ協会に加入した(Rose, p.12)。

ロレンスは、神秘思想にたいへん興味を示したが、神智学はあまりにも神秘的で地に足がついていないと感じて、協会には正式には入会しなかった。しかし、キリスト教の教義が当時の科学によって徐々に崩れていくのを感じ取っており、キリスト教の教義を拒否して、宗教よりも人間の生命に関わる宇宙の力を信じるようになった。ロレンスのジレンマが彼一人

のものではなかったことは、Gurdjieffや東洋と西洋の宗教を混合して人気を得たMadame Blavatskyが人々の心に訴えるものを持っていたことから分かる (Ellis,p.65)。

ロレンスがキリスト教への信念を失ったのは大学生時代であった。彼は、キリスト教のシンボルを拒否するのではなく解釈しなおさねばならないと考えていた。キリスト教のシンボルの中でロレンスにとって一番重要なものは「復活」であった。キリスト教会が犯した誤りはあまりにも「磔刑」を重んじ、「復活」を軽視したことである。生命ある肉体に敵意を抱くあまり、「肉体の復活」という考え方に当惑しているのだ、と考えていた(Sagar,p.300)。

キリスト教会があまりにも「磔刑」を重んじ、「復活」を軽視したことを、1929年に書いたエッセイ「復活の主」(“The Risen Lord”)で次のように指摘している。

..... 教会の仕事は、まず、人の子に生まれたキリストの意味を説くこと—それがすなわちクリスマスである。次には、十字架につけられたキリストの意味を説くこと、それが聖金曜日。そして復活したキリストの意味を説くこと。それが復活祭である。一年のうちで、復活祭から11月の万聖節までの月日が、または御告祭までの月日が、復活した主のもとにある。すなわち、花々満開の春のすべて、夏のすべて、麦や果実の実る秋のすべてが、復活したキリストに属している。

しかしながら、どの教会も、十字架につけられたキリストに固執し、一年の花の季節や実りの季節をわれわれから奪い取っている。..... 幼子キリストを女性の膝に抱かれた姿で示すこと 十字架につけられたキリストの像 このようなものはすべて、ほんとうは前置きであり、真の生きた宗教に至る準備段階のものにすぎない。(『不死鳥II』 pp.692-3)

続けて、キリストの「肉体の復活」については、次のように述べている。

キリストは生身の身体で復活した！ 死者の中から生身の身体で復活したのであり、単に靈魂として復活したのではない。使徒トマスが確かめたように、キリストは手も足も具えて復活したのである。手や足があれば、当然、口も胃袋も男性の生殖器も具えているはずである。キリストは復活した。余すところなく、生身の身体のすべてを具えて復活した。

.....

..... もしイエスが、完全な生身の身体で復活したのであれば、イエスは女の柔らかさや、女との生における大いなる喜びを知り、二人の間に子供をもけるために復活した

のである。(『不死鳥II』 p.697-8)

「花々満開の春のすべて、夏のすべて、麦や果実の実る秋のすべてが、復活したキリストに属している」と述べ、「女との生における大いなる喜びを知り、二人の間に子供をもけるために復活したのである」というエッセイ「復活の主」は、イシスに仕える女に子を宿し、冬の眠りに入り、やがて春とともに戻ってくることを約束するキリストの物語『逃げた雄鶏』を補足する第三部だとも見なされている重要なエッセイである。

しかし、『逃げた雄鶏』を読むと、なぜキリストが古代エジプト神話のイシスの女神に仕える女に出会うのかという疑問を抱かざるをえない。エルサレムでマグダラの MARIA と聖母 MARIA に出会うところで終わる第一部と、場面がエジプトに面するレバノンの山に変わり、キリストがイシスの女神に仕える女に出会う第二部とがどのように繋がっているのか、という疑問が生じる。その疑問を解く鍵の一つが Blavatsky の *Isis Unveiled* であり、また、*The Occult Review* に掲載された記事、“ISIS-MARY”である。古代の儀式を分析することで、植物と動物の生育のサイクルが同じであるとし、イシス-オシリス神話で毎年の再生を具体化したフレイザーの『金枝篇』の影響も大きい(LeDoux, pp.134-5)。年表に示したように、ロレンスは1922年に Frederick Carter に *The Occult Review* を読んでみるよう薦めていると同時に、『金枝篇』を再読している。

The Occult Review (図1, 2 参照) は英国で1905~1951年間に発行された月刊誌である。1933年から1938年間は、*The London Forum* と雑誌名が変更された。当時の著名な神秘主義者や著者 (Aleister Crowley, Meredith Starr, Arthur Edward Waite など) による記事、書評、通信欄が掲載されている。編集長は Ralph Shirley で、出版社はロンドンの William Rider and Son LTD (後に Rider & Company) である。

「オカルト」というと超常現象を扱った怪しげな雑誌ではないかと勘違いされてしまそうだが、超自然現象や心理学研究に関する問題を扱った学術的な雑誌である。1922年10月号では“Is *The Tempest* A Mystery Play”という記事で Colin Still 著の *Shakespear's Mystery Play: A Study of "The Tempest"* (London: Cecil Palmer) が論じられたり、シャーロック・ホームズ探偵小説で有名な Sir Conan Doyle の *The Coming of the Fairies* を取り上げて、‘Are The Fairy Photographs Genuine?’ という問題提起がなされたりしている。

ロレンスが *The Occult Review* を時折読んでいたことは、ロレンスの書簡集や Rose Marie Burwell の“A Catalogue of D.H. Lawrence's Reading from Childhood”から確かめることができる。注目されるのは、ロレンスが関心を寄せていたイシスの神に関する記事である。次の章では、ロレンスの『逃げた雄鶏』に描かれたイシスとキリストが、*The Occult Review* に掲載された、‘ISIS-MARY’という記事 (図1 参照) と Blavatsky の *Isis*

*Unveiled*のIsis-Mary説が基盤となって創作されたものではないかという問題を検討してみたい。

II. *The Occult Review*とBlavatskyによる‘Isis-Mary’説について

ロレンスはFrederick Carterに、『黙示録の竜』を出版するなら*The Occult Review*のRider氏が適任だと思う、という内容の手紙を1922年12月3日に送っている。ロレンスがCarterの『黙示録の竜』に付けた序文は、ロレンスの聖書に関する考え方を表したものであり、カーター氏の著書への「序文」でありながら、ロレンス自身が新たな「キリストの復活」物語を書く必要性を再認識しているようにも読める。というのは、「序文」の中でロレンスは、「黙示録」は「キリスト教寓話などではなくて、もっとスケールの大きな時代」つまり「キリストが生まれる2000年前にいたカルデア人の時代」に属する「象徴として描かれたものだ」(『不死鳥 上』p.402)と述べているからである。前述したように、ロレンスはキリスト教の教義を拒否して、宗教よりも人間の生命に関わる宇宙の力を信じるようになっており、カルデア人のスケールの大きさを次のように理解している。

カルデア人は、我々が現代科学で捉えるガスの球である太陽や、写真で捉えたあばた面の死んだ塊の月ではなく、「生きた太陽」と「生きた月」を求めた。月をアルテミス、キューベレ、アスタルテと呼んだ過去の人間たちの方が、本当に宇宙を意識し、生き生きと把握していた。(『不死鳥 上』pp.407-8,要約)

カルデア人のように、「本当に宇宙を意識し、生き生きと把握」することは現代人には困難であり、ロレンスは続けて、「我々はカルデア人の持っていたヴィジョンを取り戻すことはできない」が、「できることは、われわれの内に埋もれている古い、遠い遠い昔の体験の記憶と調和するような新たなヴィジョンを発見することである」(p.409)と述べている。ロレンスは、「月をアルテミス、キューベレ、アスタルテと呼んだ」カルデア人の時代に戻って、イシス、オシリス神話から‘phallic vision’という「新たなヴィジョン」を発見することで、キリストの新しい復活の物語、『逃げた雄鶏』を書き始めたに違いない。

ロレンスはBlavatskyの*Isis Unveiled*によって聖母マリアの原型がイシスの女神であることを知っただけではなくて、フィレンツェのミレンダ荘にいたころ、農家の人々からイシスの女神にまつわる伝説を聞いていたかもしれない(LaChapelle, p.169)。今日でも小アジアでは、観光ガイドが女神の名前をあげるとき、「クババ(世界最古の地母神)、キューベレ、アルテミス、ダイアナ、マリア」と唱えるそうである。金子 務氏は「ギリシアの文明を見よー思想の出発点ー」の中で、「ここではマリアさま、つまりキリスト教の聖母マリアも大地母

神の系譜に納めてしまう」(p.38)と述べている。

ロレンスの時代とは違って、現代の神話学ではイシスが聖母マリアのモデルとなったことが検証されている。神話学の権威であるジョーゼフ・キャンベルは、『神話の力』で次のように述べている。

… イシスは棺のふたを取り除き、遺体の上に身を伏して夫（オシリス）を抱きます。これは古代神話の中にしょっちゅう、多くの象徴的な形で現れるモチーフです—死から生命が生まれるというモチーフ。船が陸に着くと、女神はパピルスの生い茂る沼地で子供を産みます。生れた子供がホルスです。神によってはらんだわが子を抱く神聖な母親の姿（図3）がマドンナ（聖母）（図4）のモデルになったのです。

… シャトルルの大聖堂の前に立つと、西向きの入り口に聖母（マドンナ）の像が玉座の形で置かれ、その上に幼な子イエスが座って、世界の皇帝として世界に祝福を与えています。それはまさしく最古のエジプトから伝わってきたイメージにはかならないのです。昔の教父たち、昔の芸術家たちは意図的にこういうイメージを受け継いできました。（pp.316-7）

神秘思想、神智学が普及し始めたエドワード朝時代に戻って、*The Occult Review*の‘ISIS-MARY’論と、Blavaskyの*Isis Unveiled*がどのように聖母マリアをイシスの系譜に納めているのかを検討したい。まずL.Montagueの‘ISIS-MARY’の記事内容を紹介しておきたい。ほんの4ページの記事なので全文訳を掲載することにした。

1. Leopold A.D. Montague, “ISIS-Mary”（試訳）

エジプトの女神イシスは男性が創り出した最初のイメージである。イシスは天の神と地の神との間に生まれた娘であり、オシリスの配偶者または「妹」だとされている。イシスとオシリスの子供がホルスであり、オシリス、イシス、ホルスがエジプトにおけるもっとも重要な三位一体を形成している。

ギリシャ神話によるとイシスはアルゴスからやって来た女神で、イオ、つまり月の女神と同じだとされている。イシスの甥であるアピスはエジプトの王となり、死後はサラピスとして崇められた。イオは牛の角を持っていて、それは三日月を象徴している。トロイア、ミケナイなどを発見したドイツの考古学者であるシュリーマン(Schliemann,1822-1890)によると、ヘラ、イオ、デメテルはイシスと同一の女神だという。

シュリーマンがミケナイで発見したヘラの像は、おそらく紀元前1000年以上前のものであると思われる。ギリシャ世界においては、女神のイメージはさらに古いものの、名前は与えられていないで、ただテラコッタで作られた素朴な像がいくつか立っているだけである。数

世紀後には、デメテル（大地の母）、ヘラ、などの名前がつけられた。ギリシャ神話の女神は地上で扱う問題に合わせてそれぞれに名前がつけられた。ヒンズー教のシヴァの女神は数えきれない程の名前で崇められている。その一つはイサの女性形のイシ、イサニであり、イシスと同一の女神だとされている。

エジプトでイシス崇拝が衰えると、ギリシャで人気を得ようになり、さらにローマへと移っていった。ローマでは時々周期的にイシス信仰が禁止されたが、1世紀の中ごろにはイシスの神殿がさまざまな場所に建てられた。ポンペイにも見られた。イシス信仰はローマの神々と入れ替わるほど栄え、コンスタンチヌス皇帝によって確立されたキリスト教の下でも信仰され続けた。ローマ皇帝ユリアヌス（A.D.360-363）の絶大な支持を受けたため、教会はパニックに陥った。イシスを信仰する人々はキリスト教に改宗することを拒んだ。しかし、ついに和解がなされた。条件は、イシス信仰者もキリスト教徒として認めるが、今後は女神の名前はイシスではなくて、聖母マリア（Virgin Mary）とすることであった。幼子ホレスは幼子イエスとして崇められることになった。この二つの宗教が融合したという歴史的証拠はないとしても、そのようなことが実際起こったことは以下に述べる事実が示している。

- (1) ヨゼフの妻マリア（Mary）は神聖な存在であり、「天の女王」（Queen of Heaven）であるという教義は、新約聖書のどこを探しても見当たらないし、初期のキリスト教の信仰にもない。英国の法制史学者メイトランド（Maitland, 1850-1906）は次のように書いている。Lapidarian Gallery（碑文を保存しているギャラリー）には聖母マリア（Virgin Mary）の名前はない。アリオク王、ボルデッティ、ボターイの著書にも出てこない。ローマ・カトリック教の国々で捧げられているマリア（Maria）への祈祷文は381年になってようやく現れる。カタコンベにはマリア（Mary）の肖像が多くみられるが、聖書物語に付随して登場するだけであり、脇役と見なされていた。
- (2) 一方で、ずっと後になって、マリア（Mary）という概念はイシスと何ら変わらないと見なされ、「天の女神」（Queen of Heaven）「神の母」（Mother of God）「処女（純潔な夫人）」（Our Immaculate Lady）と名付けられた。現在ではイエスの母マリア（Mary the Mother of Jesus）という称号が与えられている。マリアのシンボルはイシス神のものである三日月であり、イシスの青い衣をまとっている。聖母（Madonna）は幼子をあやす姿をしている（図4）。幼子を抱く聖母は、初期のキリスト教徒には好まれず、たいていホレスを抱くイシスの姿（図3）で表わされていた。
- (3) イシス崇拝者が、イシスとイシスに仕える司祭のイメージを持ってキリスト教会に入ってきたのであろうとの説を述べてきた。最初の指摘はRev.C.W.Kingの

*Antique Gems*の記述 (p.301) によっている。キング氏は次のように述べている。「ホルスをあやすイシスは、聖母マリア (the Virgin) と幼子イエスへと自然に変化していった。ただ単にイシスの彫刻がマリアの彫刻に変わったのではない。なぜならフランスのとある教会で黒い肌をした聖母マリア像 (Black Virgins) (中世の初期から崇拝されていたが1794年に教会のあらゆるものが不運にも破壊されてしまった) がモンフォコン (Montfaucon) によって発見されているからだ。その像は玄武岩で作られたエジプトの女神であり、ただ名前が変えられているだけであることが分かった。今でも昔と変わらず神殿には敬虔な信者がいる」。

教会の司祭の話によると、ローマ教会の司祭が剃髪しているのは、古代のイシスの司祭の名残である。祝福をする時の指の動作もイシスの神の儀式から来ていて、「ホルスの梯子」(ladder of Horus) と呼ばれている。

私はローマ・カトリック教を非難する気はさらさらないし、また、今では聖母マリア (Virgin Mary) の名で多くの信者に崇拝されている、遠い昔の女神に異議を申し立てるつもりもない。聖母マリアの熱心な信者によって立証された癒しの奇蹟を疑うことはしないし、また、心から聖母マリアを崇拝する人々が、純潔という霊的な力や能力に触れていることを否定することもしない。しかしこれだけははっきり言っておきたい—聖母マリア (Virgin Mary) は、ローマ・カトリック教の国々で崇拝されているが、イエスの母であるマリア (Mary) とは何の関係も持っていないのである。聖母マリア (Virgin Mary) は、太古からそうであったように、かつてイシスの名で崇められた女性の姿を備えた神の化現なのである。

2. Madame Blavasky, *Isis Unveiled* について

この書の初版は1877年にニューヨークとロンドンで出版された。'A Master-key to the Mysteries of Ancient and Modern Science and Theology' という副題がつけられている。Vol. I—Science (628p.)、Vol. II—Theology (640p.) という二部構成の大著である。表題の次のページをめくると、'The Author dedicate these volumes to the Theosophical Society, which was founded at New York, A.D.1875, to study the subjects on which they treat.' と書かれている。著者のH.P.Blavatskyは、ロシア出身の神智学者で、1875年にTheosophical Society (神智学協会) を創立した。

1931年にはAnniversary Editionが出版されている。この版の出版者による序文には、初版はニューヨークでJ.W.Boulton氏によって出され、12版を重ねた。その間、ロンドンでRider氏によって、初版の複製版が出されたが、今や絶版になっている、と説明されている。1976年にはカリフォルニアのTheosophical University Press からも複製版が出版されている。この版には「初版に忠実な複製版」で、Blavatskyの著作目録と、“Theories about

Reincarnation and Spirits”と“My Books”という二篇の重要な記事が付け加えられている。

*D.H.Lawrence and the Bible*の著者T.R.Wrightは、ロレンスがBlavatskyの影響を多く受け、聖書とロレンスの作品には間テキスト性があると、次のように述べている。

Blavatskyは、相反するものの結婚が必要であるというロレンスの信念に貢献したかもしれない。*Isis Unveiled*は、例えばカインとアベル、キリストと悪魔のような驚異感を与える主人公の組み合わせを引き合いに出して、相互の不可思議な関係を提示している。……いつものようにロレンスの著書と聖書には間テキスト性が見られる。(p.112)

ロレンスはノッティンガムにいた頃、ウィリアム・ホプキンとともにTheosophical Societyの会合に少なくとも一度は顔を出している。1917年にはロンドンでTheosophyに関する講演を何度か聞きに行っている。当時はtheosophyとesotericism(秘教、密教)が普及していた。ロレンスが*The Occult Review*を時々読み、その後まもなくMadame Blavatskyの主要作品*Isis Unveiled*と*The Secret Doctrine*を読んだことをDavid Eder宛の手紙で「*The Secret Doctrine*はつまらないが、驚くべき情報が得られる。僕は‘theosophist’ではないが秘教の教義には啓発させられる」、と1917年の7月に書いている。(Wright, p.117)

Wright氏は、「*Isis Unveiled*には、ヨハネの黙示録[アポカリプス]がカバラ教[ユダヤの神秘思想]のエノク[カインの長男、創世記4:17-18]の書から発していると説明しており、この説をロレンスを含む神秘主義者が発展させることになった」(p.117) ([]内筆者))と述べている。Blavatskyはロレンスほど‘phallicism’(男根崇拜)にこだわらなかった(p.119)という。

Blavatskyは聖書を文字通りに解釈するのではなく、行間を読み、今では失われてしまった神聖な理知を見つけ出そうとした。ヘブライ語で書かれた聖書には二重の源があることを指摘した。表面に出ているのはバビロニア捕囚時代(前597&586年ネブカドネザル2世がエルサレムを破壊、ユダヤ人捕囚)に縮写されたものである。奥に隠されているのは、ロレンスが彼らの宇宙観に共感を示した、カルデア人の時代にまで遡るより古い資料だという。(p.118)

*Isis Unveiled*の中でBlavatskyは、異教はキリスト教によって、キリスト教は異教によって変化したという。三位一体の見解はエジプトの伝統によって確立された。イシスと聖母マリアとの関係については次のように説明している。

イシスの名前は変わったが、イシス崇拜が復活しただけではなく、三日月の上に立つイ

シス像も再現されたのである。幼子ホルスを腕に抱く女神として親しまれた像が、聖母マリアと幼子という芸術的で美しい姿として創造されて、我々の時代まで伝わってきたのである。

しかし、処女、「神の母親」(“Mother of God”)、天界の女王 (Queen of Heaven) という名称の起源は、エジプト人やカルデア人の時代より古いかもしれないとされている。イシスは紛れもなく天界の女王でもあり、その手には、この世で作られた十字架と、グノーシス主義派[1～3世紀に地中海世界に興った宗教思想運動]の十字鏡を持っているにもかかわらず、神聖な処女Neithよりもかなり年が若いのである。(Vo.II, pp.49-50[]内筆者)

Blavatskyはまた、*The Occult Review*の‘ISIS-MARY’で論じられていた、「黒い肌をした聖母マリア」(‘Black Virgins’)についても次のように説明している。

「イシス夫人は純潔である」(“Immaculate is our Lady Isis”)は『グノーシス主義者とその遺跡』という著書の中で、王によって描かれたセラピス(牛神、古代エジプトのオシリスとアピスの合成神)の彫刻にまつわる伝説である。この言葉は、後にあの御方(聖母マリア)に対して使われるようになった。聖母マリアは、イシスの姿、称号、シンボル、儀式、式典などを受け継いだ…。このようにして、イシス崇拜者は新しい聖職に就き、自分たちの身分を表す以前と同じ記章を付け、独身生活をし、剃髪にしたが、遺憾ながら、宗教上の綱領で指示されていた洗淨式は省略してしまった。フランスの、とある大聖堂で崇められている「黒い肌をした聖母マリア」が、詳しい調査の結果、玄武岩で彫られたイシスであることがついに証明された。(Vol.II, pp.94-95)

Blavatskyの*Isis Unveiled*と*The Occult Review*の‘ISIS-MARY’に共通している点は、イシスの女神がキリスト教によって聖母マリアと名前が変えられたことを証明しようとしていることだ。「幼子ホルスに乳を飲ませるイシスの女神」(図3)が「幼子イエスを抱く聖母マリア」(図4)に姿を変えただけである。聖母マリアが身にまとっている青色の衣もイシスの女神の衣の色と同じである。そして何よりの証拠は、フランスに今も残る「黒い肌をした聖母マリア」崇拜である。聖母マリアとして祭られているが、元々は玄武岩で彫られたイシス像であったのだ。「黒い肌をしたマリア」こそが、イシスの女神と聖母マリアとの接点なのである。キリスト教の聖母マリアは「かつてイシスの名で崇められた女性の姿を備えた神の化現」(‘ISIS-MARY’,p349)、つまり地母神の系譜に納められている。

以上が、イシスと聖母マリアとの関係であるが、ではロレンスは、イシスの女神に仕える女によって甦るキリスト復活の物語、『逃げた雄鶏』の中で、どのようにしてイシス—マリア、オシリス—キリストの物語を展開したのか、その構図を次の章で具体的に見てみたい。

III. Isis-MaryとOsiris-Christ—「新しい神話」創造の構図

「最初は『逃げた雄鶏』という題で出版された『死んだ男』は、一つの芸術作品における、芸術的、神話詩的想像力の最高の勝利であり、同時に、古い神話の再創造と新しい神話の創造である」とLarry V. LeDouxは、論文“Christ and Isis: The Function of The Dying and Reviving God in *The Man Who Died*”で述べている(p.132)。ロレンスは古い神話、つまりエジプトの神話を原動力にして「新しい神話」を創造したのである。

物語の第一部は十字架から降ろされたキリストが墓から出て、傷をいやし、周囲の生き物(特に鶏)や草木によって、徐々に生の衝動に気づくまでが描かれている。死衣をまとった男(キリスト)が墓で目をさまし、逃げてきた雄鶏を捕まえてやったお礼にエルサレムの農家の庭にかくまわれる。翌日墓にキリストの亡骸を探しに来たマデレン(マグダラのマリア)に出会う。「わたしに触れてはならない」(聖書ヨハネ伝20章17節)「まだ駄目だ。まだ傷が癒えていないので、他人と触れ合うことができない」(pp.23-24)とマデレンに言う。男は母(聖母マリア)にも背を向けて「救世主としての自分は死んだ」と悟り、肉体を持って一人の人間として甦るために孤独を感じながら自分の道(my own single life)を進んでいく。

第二部は一年後に完成させたもので、場面がエルサレムからエジプトに近い海岸のそばの寺院に変わる。そこで一度死んだ男(キリスト)はオシリスを探すイシスの女神に仕える女に出会い、肉体の生命力に触れることで、心と身体の合一を成し遂げ、肉体的生命力を受け入れることができるようになる。第二部は、第一部とは別の話になっていて全体として統一に欠けると思われるかもしれない。しかし“Christ and Isis”論を書いたL.V. LeDouxは、キリストとオシリスの類似性には、死んで甦る神という原型があると指摘する。「『死んだ男』(『逃げた雄鶏』)に描かれた新しい神話には自然のサイクルとイシス—オシリス神話が下敷きになっていることが分かる」(p.134)と指摘している。そこで、『逃げた雄鶏』がイシス、オシリス神話を基盤にしてロレンスが「新しい神話」を創造しようとした物語だと考えると、第一部に登場したマデレン(マグダラのマリア)と男の母(聖母マリア)が、第二部ではイシスに仕える女とイシスの女神に引き継がれていることに気づく。聖母マリアが古代エジプトの地母神であるイシスの女神の系譜に納められたのである。

オシリスについて説明しておく、彼はエジプトの神で、死と復活の神とされている。イ

シスと結婚するが弟のセトに殺される。残されたイシスは子ホルスを産む。ホルスが成長して父の仇を討ち、イシスの努力で復活する。ギリシャ神話では、オシリスは殺されて肉体を14の断片に切り刻まれて、エジプトの国中にばらまかれた。彼の妹でもあり、妻でもあるイシスはがすべての断片を拾い集めたが、男根だけは見つからなかったとされている。

第一部に登場した男(キリスト)も第二部ではオシリスの象徴的役割を引き受けることになる。オシリスを探し求めるイシスに仕える女は、一度死んだ男(キリスト)がオシリスの化身ではないかと考え、まるで儀式であるかのように三度質問する。

だが男の答えは聞かれる度に異なる。男は自己を偽ることなく、自分をオシリスと同一化することはしない。

一度目、「待って！あなたはオシリスですね」、これを聞いて男は突然笑い出す。「いや、まだオシリスではない、だがイシスが望むならもう一晩山羊の洞で寝させてもらおう」(*The Escaped Cock*, p.46)、と言う。

二度目、その夜イシスの女は同じ質問をする。男は恐れを認めながら、「もしあなたが私を癒してくれるなら、オシリスである。…… 死の孤独に襲われ、それから逃れられないのだ」(p.47)と答える。

三度目は、神殿の中で、イシスの女が男の傷を癒しているときに質問をする。「あなたはオシリスですね?」、男は否定でも肯定でもない答えをする。「もし、あなたが望むなら」(p.53)。男はこれは女の夢であり、彼女を傷つけることができなかったのだ(p.54)。

一度目に男が否定したのは、十字架に架けられた時の傷が癒えていない不完全な身体なので、いわば男根を欠いた状態のオシリスであるからだ。

二度目は、もしもイシスの女が男の傷を癒してくれば、甦ったオシリスの象徴として交わることができるという条件を出す。

三度目にイシスの女によって癒された男は、ようやくオシリスの象徴的役割を受け入れた。こうして、キリストはオシリスの役割を引き継ぐことになるのである。

男は父である神の元へは昇らずに、植物が枯れて地中に種をし、春に甦るように、象徴的な死への旅に出る。男が種をまいた(子を宿した)イシスの女の肉体から離れることで新たに生まれ変わるためである。

「やがてすぐ、ここを出ていかねばならない。奴隷たちのために、厄介なことがわたしの身にふりかかろうとしている。でも、私は男だし、世界は広い。それに、私たち二人の間にあるものは良きものであり、堅固なものだ。安心するがいい。そして、ナイチンゲールが谷の底から再び声をあげるとき、私は必ず戻ってくる、春がめぐりくるのと同じように、確かに。」(p.60)

物語は男が舟で去って行くところで終わる。

「私は私の命と復活の種をまいた。女の身体に触れた。その香りをバラの香りのようにまとっていこう.... 小舟のおもむくままにさすらおう。明日は明日の風が吹く。」
(p.61)

「新しい神話」を創造することでロレンスはキリストが奉仕の愛ではなく、人を愛することを学んだことをも描いている。男が己の肉体で力強く愛することができることを。「私は死んだ肉体で人々を愛そうとした。もしも生きた愛でユダにキスをしていたなら、たぶんユダは死のキスをするとはなかったであろう。肉体で私を愛したはずだ。私はユダに肉体のない私を、愛の死骸を持って愛すようにしむけた (willed) のだ」(p.55) とロレンスは『逃げた雄鶏』の中で男(キリスト)に語らせている。

エジプト神話でイシスの女神が、甦ったオシリスによって子を宿すことで、ナイルの川があふれ豊穡がもたらされたように、イシスの女神は「キリストに、男としてだけではなく、自分が何者であるかを悟らせ、肉体のリズムと自然の季節のリズムに気づかせる」(LeDoux, p.141) のである。「新しい復活の物語」を作るというロレンスの目的は、キリストとイシスの女神との合一によって達せられている。

おわりに

ロレンスがイシス、オシリス神話とキリストの復活に言及したのは、自らをキリストに例えて髭を伸ばし始めた1915年30歳の時のことである。アスキス首相夫人、シンシア・アスキス宛ての手紙が残っている。

僕の心臓は千々に砕かれてしまいました。僕にはオシリスや、イシスのように、とてもバラバラにされた断片を集めるエネルギーがありません。.....

もう一度、全くはじめてからやり直したいのです。ゲッセマネの祈り、磔刑、埋葬、これらの過程はもう終わりにしなければなりません。復活しなければならぬのです。傷の癒えた両手と両足、完全な肉体、さらに新しい魂を持って復活するのです。なによりも新しい魂を備えた復活です。今までのことは終わったのです。この30年間の人生に終了符が打たれ、すっかり忘れ去られ、新しく生まれ変わるのです。新しい天と地が必要です。それに新しい心臓と魂も。すべてが新しい、正真正銘の復活が必要なのです。

(*Letters* Vol.II 1913-16、pp.454-455)

『逃げた雄鶏』が書きはじめられたのは1927年、書き上げられたのが1928年8月であった。1927年のイースターの季節にエトルリア遺跡を訪れ、復活の卵と玩具の雄鶏がこの小説を書くきっかけになったと言われている。しかし30歳から抱き続けてきた「復活」というテーマがなによりも「死期に近いという自覚」によって、「より具体的な復活の概念を与えた」(Sagar,p.304)のである。

ロレンスは同時期にエッセイ「復活」、「復活の主」と『アポカリプス論』を書いているが、復活を描いた小説は『逃げた雄鶏』だけである。上記の手紙に書かれているように、ロレンスは「新しい天と地」を求めて、世界各国を旅してまわった。またキリスト教に疑義を抱いたロレンスは当時普及していた神秘思想にも興味を抱き、*The Occult Review*やH.P. Blavatskyの著作を読んだ。その中から地中海沿岸地方に今日までも伝わっているIsis-Mary説に出会う。

世界各国放浪の旅の果てに戻った地中海沿岸地方で、折しも復活祭の日に、ロレンスは、力の弱まったキリスト教に生気を与え、人々に自然界のリズムと肉体のリズムを取り戻すために、Isis-Mary説をふまえて、キリスト教とイシス-オシリス神話との合一を試みた『逃げた雄鶏』の着想を得る。こうしてようやく、ロレンスが作家として生涯求め続けた「すべてが新しい、正直正銘の復活」の物語が完成したのである。

JUNE 1922

ONE SHILLING NET

THE OCCULT REVIEW

EDITED BY RALPH SHIRLEY

Contents

NOTES OF THE MONTH By the Editor
Dr. John Doe

THE LORE OF THE PHANTOM COACH
By G. H. Myhrum

THE INFLUENCE OF ATLANTIS ON EGYPT
AND MEXICO
By Lewis Spence

PASTEUR AND THE PROBLEM OF LIFE
By H. Stanley Redgrove

ISIS-MARY
By Leopold A. D. Mantague

SUBLIMINAL By Ethel Archer

FROM SUBCONSCIOUS TO CONSCIOUS
By L. E. Parker

PERIODICAL LITERATURE

CORRESPONDENCE

REVIEWS

LONDON: WILLIAM RIDER AND SON, LTD.
CATHEDRAL HOUSE, PATERNOSTER ROW, E.C.

UNITED STATES: THE INTERNATIONAL EDISON COMPANY, 3511 4TH AVENUE, NEW YORK, N.Y.
NEW ZEALAND: NEWS COMPANY, DUNEDIN. WESTERN PERSIA: COMPANY, ISFAHAN.
AUSTRALASIA AND SOUTH AFRICA: GORDON AND GOTCH,
GATE TOWER, GARDNER AND BIRD, LTD.
INDIA: A. H. WHEELER & CO., AND "THE OCCIDENT" OFFICE, AHMEDABAD, BARODA.

Printed at Second-class Matter at the New York Post Office, Sept. 18th, 1922.
Registered at the G.P.O. London for transmission in Canada by Canadian Magazine Post.

図1 'ISIS-MARY' が掲載された *The Occult Review*, June 1922 (表紙)

OCCULT REVIEW

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE INVESTIGATION OF SUPER-NORMAL PHENOMENA AND THE STUDY OF PSYCHOLOGICAL PROBLEMS.

EDITED BY RALPH SHIRLEY

"Nullius addictus jurare in verba magistri"

Price ONE SHILLING NET; post free, ONE SHILLING AND TWOPENCE. Annual Subscription, TWELVE SHILLINGS (Three Dollars).

AMERICAN AGENTS: The *International News Company*, 85 Duane Street, New York; The *Macoy Publishing Company*, 45-49 John Street, New York; The *Western News Company*, Chicago.

Subscribers in India can obtain the Magazine from A. H. Wheeler & Co., 15 Elgin Road, Allahabad; Wheeler's Building, Bombay; and 39 Strand, Calcutta; or from *The Theosophical Publishing House*, Adyar, Madras.

All communications to the Editor should be addressed c/o the Publishers, WILLIAM RIDER & SON, LTD., Cathedral House, Paternoster Row, London, E.C.4.

Contributors are specially requested to put their name and address, legibly written, on all manuscripts submitted.

VOL. XXXV

JUNE 1922

No. 6

NOTES OF THE MONTH

DR. JOHN DEE, a study of whose life and adventures, by Mrs. G. M. Hort, has just appeared in the *Mystics and Occultists Series*,* was one of those original characters who have figured from time to time in the history of occult research, and who have been remembered in after ages rather for what they were, and the part they played in the historical romance of their time, than for any notable contribution which they made to the body of scientific knowledge or occult philosophy. More might have been expected of Dr. Dee, who was a man of deep learning and erudition, if he had not been led away by his own credulous enthusiasm in pursuit of occult methods of obtaining wealth,

which for ever eluded his too sanguine hopes. JOHN DEE. Dee was the son of a certain Roland Dee, who held an appointment at court as gentleman server to Henry VIII. Presumably he was one of those Welshmen whose families came along in the train of the Duke of Richmond, afterwards Henry VII, who was the first Welsh monarch to ascend the British throne. It is curious how, after the downfall of the old Norman royal family that had split up into the two branches of Yorkists

* *Dr. John Dee, Elizabethan Mystic and Astrologer.* By G. M. Hort. 2s. net. London: William Rider & Son, Ltd., 8 Paternoster Row, E.C.4.

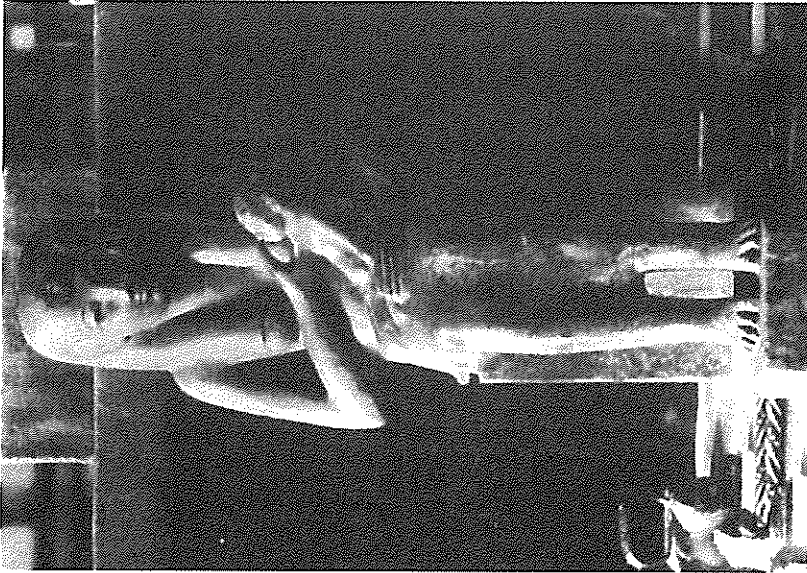


図3 ホレスに乳をやるイシス

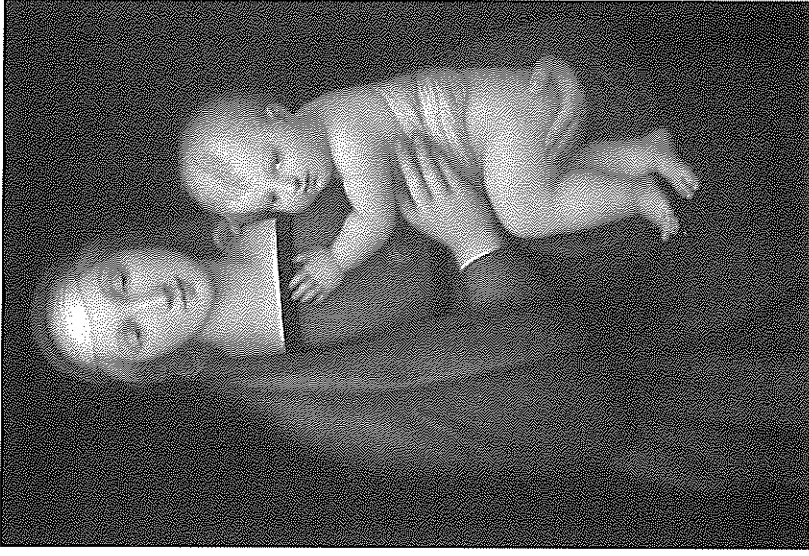


図4 イエスを抱く聖母マリア (ラファエロ)

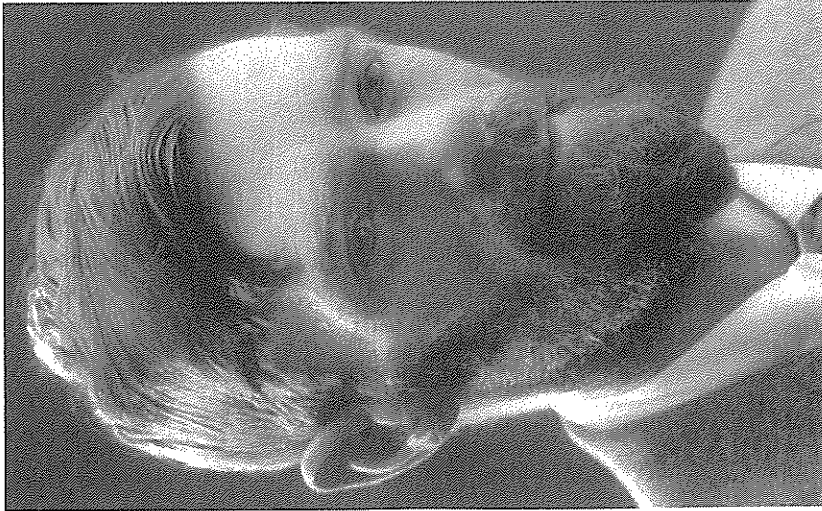


図5 キリストの風貌をしたD. H. ロレンス(1929年)

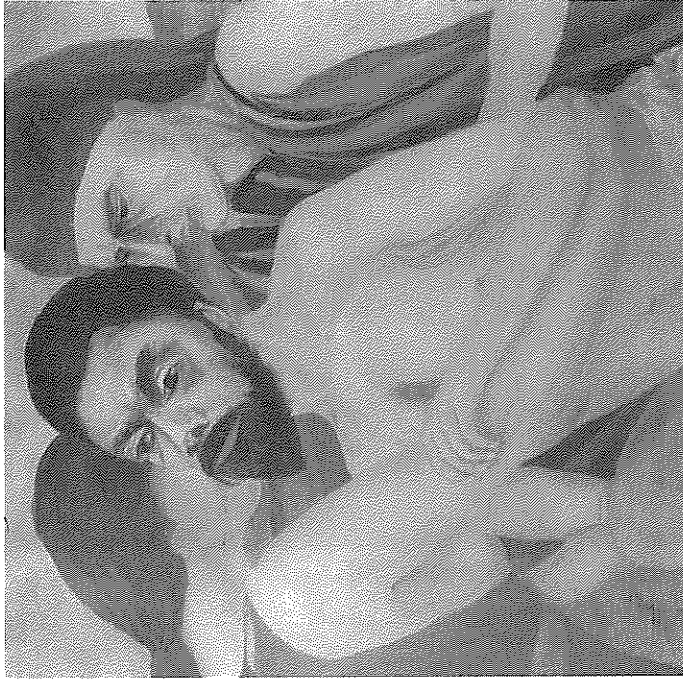


図6 D.H.ロレンスによる「復活」の絵画

参考文献

- Blavatsky, H.P. *Isis Unveiled: A Master-key to the Mysteries of Ancient and Modern Science and Theology, Vol.I & II*. California: The Theosophy Company, 1931.
- Boulton, J.T & Robertson, A (eds). *The Letters of D.H.Lawrence Vol.III 1916-21*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1984.
- Boulton, J.T.& M.H.Boulton (eds). *The Letters of D.H.Lawrence Vol.VI 1927-28*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1991.
- Burwell, R.M.“A Catalogue of D.H. Lawrence’s Reading from Childhood,” *The D.H. Lawrence Review*, Vol. 3, No.3, Fall, 1970.
- Ellis, D. *Death and the Author.: How D.H.Lawrence Died, and was Remembered*. Oxford: Oxford Univ. Press, 2008.
- LaChapelle, D.H. *Lawrence Future Primitive*. Texas: Univ. of North Texas Press, 1996.
- Lacy, G. M.(ed). D.H. Lawrence, *The Escaped Cock*. Los Angeles: Black Sparrow Press, 1973.
- Lawrence, D.H. *Mornings in Mexico and Etruscan Place*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1967.
- LeDoux, L.V. “Christ and Isis: The Function of the Dying and Reviving God in *The Man Who Died*,” *DHLR*, Vol.5, No.2, Summer, 1972.
- Montague, A.D. “Isis -Mary,” Shirley, R.(ed). *The Occult Review*. Vol.XXXV, June 1922, No.6, pp.347-349.
- Roberts,W., et al (eds). *The Letters of D.H.Lawrence Vol. IV June 1921-March 1924*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1987.
- Rose, J. *The Edwardean Temperament, 1895-1919*. Athens: Ohio Univ Press, 1986.
- Sagar, K. *D.H.Lawrence : Life into Art*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd, 1985.
- Shirley, R. (ed.). ‘Notes of the Month’, *The Occult Review*. Vol.XXXVI, October 1922, No.4, pp.197-214.
- Wright, T.R. D.H. *Lawrence and the Bible*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2000.
- Zytaruk, G & Boulton, J.T. (eds). *The Letters of D.H.Lawrence Vol. II 1913-16*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1981.
- 青木 保. 『異文化理解』. 中央公論新書. 2001年.

- 金子 務. 「ギリシアの文明を見よー思想の出発篇」、『街角の文化史』. 中央公論新社、2007年.
- 豊国 孝. 『D.H.ロレンスの小説ーシンボル、神話、時間ー』. 共同文化社、2001年.
- エドワード・D・マクドナルド. 池田良治訳「序文・作品解題」、『不死鳥 上』. 山口書店、1984年.
- D.H.ロレンス. 福田恒存訳『死んだ男・てんたう蟲』. 新潮文庫、1967年.
- D.H.ロレンス. 浅井雅志訳「はしがきと序文『黙示録の竜』フレデリック・カーター」、『不死鳥 上』. 山口書店、1984年.
- D.H.ロレンス. 諸戸樹一訳「復活」、『不死鳥 下』. 山口書店、1986年.
- D.H.ロレンス. 諸戸樹一訳「復活の主」、『不死鳥 II』. 山口書店、1992年.
- D.H.ロレンス. 土方定一・杉浦勝訳『エトルリアの遺跡』. 美術出版社、1973年.
- J. キャンベル、B. モイヤーズ. 『神話の力』. 早川書房、1994年.
- 出水純子. 「D.H.ロレンスとエトルリア遺跡」. 『大谷女子短期大学紀要』第29号、pp.106-130.1986年.
- Wikipedia, the free encyclopedia http://en.wikipedia.org/wiki/The_Occult_Review